

稲葉課長	<p>お時間になりましたので、ただいまから、令和5年度静岡県立美術館協議会を開催いたします。本日の進行役を務めます、企画総務課長の稲葉と申します。よろしくお願いいたします。</p> <p>本日はお手元に配付しております次第により、本協議会を進めてまいります。また本日の協議会の資料に加えまして、令和4年度の年報および令和4年度に開催されました企画展の図録などをお付けしておりますので、よろしくお願いいたします。</p> <p>なお、協議会の議事内容につきましては、議事録にまとめ、情報提供の推進に関する要項に基づき、一般公開されることを御了解ください。</p> <p>本日の委員および美術館の出席者につきましては、お手元の、静岡県立美術館協議会出席者一覧のとおりでございます。</p> <p>初めに交替をされました委員の方々の御紹介をいたします。お手元の静岡県立美術館協議会委員名簿を御覧ください。</p> <p>社会教育区分、文化団体代表、木苗直秀委員の後任に、鈴木壽美子委員。 学校教育区分、高校教育関係、宮本宗明委員の後任に、鈴木雅道委員。 家庭教育区分、社会教育委員、漁田俊子委員の後任に松永由弥子委員。 学識経験区分、文化振興関係、石塚正孝委員の後任に、加藤種男委員。 同じく学識経験区分、学術関係、立田洋司委員の後任に、富沢壽勇委員。 同じく学識経験区分、報道機関代表、角田裕之介委員の後任に、本郷徹志委員。 以上6名の皆様に就任をお願いいたしました。</p> <p>それでは、委員の半数近くが替わられておりますので、委員の皆様に簡単に自己紹介をお願いしたいと思います。今御覧になりました名簿の順番でお願いいたします。 まず最初に鈴木壽美子委員、お願いいたします。</p>
鈴木壽美子委員	<p>静岡県文化協会会長の鈴木壽美子でございます。よろしくお願いいたします。</p> <p>こちらの協議会には、私が以前文化協会会長を9年あまり務めましたときからずっと、協議委員として参加させていただいておりまして、昨年木苗先生と替わったんですけれども、木苗先生の体調が悪いことで、もう一度、ということで、今会長に復帰しております。おかげさまでこの協議会に久しぶりに出席することができて、うれしく思っております。よろしくお願いいたします。</p>
稲葉課長	<p>続きまして、見城秀明委員、お願いします。</p>
見城委員	<p>校長会の方から参りました、見城と申します。</p> <p>市の方では、中学校の美術の研究部長、それから県の方では、小中学校の美術教育図工美術の教育の研究部長をしております。現在は伝馬町小学校という所に勤めさせていただいております。よろしくお願いいたします。</p>
稲葉課長	<p>続きまして鈴木雅道委員。</p>

鈴木雅道 委員	<p>改めましてこんにちは。横須賀高校校長の鈴木と申します。どうぞよろしくお願ひします。</p> <p>静岡県高等学校美術工芸教育研究会の会長を拝命しております。12年前まで4年間、学芸課の方に勤めさせていただいてましたので、非常に懐かしく思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。</p>
稲葉課長	<p>続きまして、石川善太郎委員。</p>
石川委員	<p>静岡新聞社の石川と申します。よろしくお願ひいたします。</p> <p>静岡新聞ではですね、今年4月から夕刊を廃止しまして、朝刊を新しく刷新すると同時にデジタルを強化するという取り組みを始めております。</p> <p>その中で、部の再編を行いまして、新たに教育文化部というところを設けましたので、夕刊の色々な特集面を朝刊に移行して、また新たな紙面として作り直しているところです。</p> <p>今日こういう場で、出席していらっしゃる皆様の意見を聞きながら、また今後の紙面作りの参考にさせていただきたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。</p>
稲葉課長	<p>続きまして、加藤種男委員。</p>
加藤委員	<p>静岡県文化財団の中に設置をいただきましたアーツカウンシルのカウンシル部長を拝命しております、加藤でございます。よろしくお願ひいたします。</p> <p>アーツカウンシルというものは、まだ全国でも、県レベルでいくつか設置がありますが、10箇所くらいできたかと思ひますが、市のレベルでも2、3やっておられる。名称はいろいろあるのですけれども、やっておられる。</p> <p>なぜこういう今までなかったものをあえて作ろうとしているかということについては、一つは、色々な行政や規則がそれぞれ非常に良い制度を出しておられるのですけれども、その全体的な総合力を高めるという点が、今後の課題となっている点で、アーツカウンシルというものを作って、総合力を高めていく。当然、美術館も非常に重要なその要素になるわけですから、そういう意味でやっぺいこうということで、もう一つは、今まではどちらかという、やや専門家を中心に文化政策というものを推進してこられたと。むしろ県民がダイレクトに文化政策や文化の活動に深くコミットしていくという所を底上げをしていきたいと、その観点から設置をしていただいたわけでありませう。どうぞよろしくお願ひします。</p>
稲葉課長	<p>続きまして、本日曾根委員の代わりに御出席されています、佐野牧夫様。</p>
佐野様	<p>曾根会長が外国へ行って、台風で飛行機が到着できなくて、急遽、副会長佐野が出</p>

<p>稲葉課長</p>	<p>席しました。私は今、幼稚園の園長をやっていますが、かつて県庁の中で美術館を立ち上げたときから関わりまして、グランシップも作ったりして、文化の面では県庁の中でも、一番先端をいった時がありました。今ではもう年をとってしまったんですけども、よろしく願いいたします。</p> <p>続きまして、富沢壽勇委員、お願いします。</p>
<p>富沢委員</p>	<p>どうもみなさん初めまして。今は静岡県立大学の副学長で、国際交流の担当をしております。</p> <p>学内でムセイオン実行委員会っていうのがありまして、そちらの方で、委員長をさせていただいています。こちらの富澤かな先生もそうなんですけれども、ムセイオン関係の色々な活動というのは、スタンプラリーとかもあります。さらに実質的な総合7機関の連携というのをこれからやっていけたらいいなと思っており、美術館の方で協議会の委員をさせていただくことは、大変楽しみにしております。それから、学内のグローバル地域センターという所にも関わっておりまして、これは地域社会との関わりを非常に重視しているセンターで、地域社会との連携という意味でも、これから色々とお一緒に考えさせていただければと思います。よろしく願いいたします。</p>
<p>稲葉課長</p>	<p>続きまして、富澤かな委員、お願いします。</p>
<p>富澤委員</p>	<p>こんにちは。富澤でございます。県大の「とみざわ」の二人目で、ちょっと難しいんですけども、私は国際関係学部の比較文化やアジア研究などを教えている者で、専門は近代インドの宗教学をやっています。決して美術に明るいわけではございませんが、前職で図書館を作る、という仕事に関わっていたことがありまして、お声をかけていただきました。となりの大学におりますので、一利用者としてとても美術館にお世話になっています。このような立場で、参加させていただいております。どうぞよろしく願いいたします。</p>
<p>稲葉課長</p>	<p>続きまして、日比野秀男委員、お願いします。</p>
<p>日比野委員</p>	<p>日比野秀男でございます。現在掛川市の二の丸美術館とステンドグラス美術館で館長をしております。古く申し上げましたら、美術館は開館38年目なんではないか。私はその前、準備室というのが6年ありまして、そこから10年間、この美術館とは関わりがありました。ですから、準備室が6年、開館後4年、合計10年間関わらせていただいたのですけれども、その後辞めてから30数年経っておりますけれども、どういう感じですかと言われると、よく分からないのですけれども、環境も変わったし、一般の市民の美術に対する接し方も変わったし、静岡・清水周辺の文化施設も変わったし、</p>

稲葉課長	<p>ここから40周年を目指して計画も出ているようですけど、開館時以上に大変な時代、あるいは大変な計画を作っていくことが必要ではないかなと思います。十分なことができるかどうか分かりませんが、よろしくお願いします。</p> <p>続きまして、望月宏明委員をお願いします。</p>
望月委員	<p>県の観光協会の専務理事の望月でございます。よろしくお願いいたします。</p> <p>私ども県の観光協会はずね、もちろん本県の集客促進事業を中心にやっているところでございますが、御承知の通り、コロナになったり、色々な事が起こる中で、今までの物見遊山の観光だけではなくて、歴史・文化・芸術とも合わせた中で、幅広い中での観光というものをターゲットにしながら、企画推進しているものですから、美術館の協議会の中でも、そういったところを役立ててもらえたらと思います。どうぞよろしくお願いいたします。</p>
稲葉課長	<p>なお、堀切委員はまだお見えになっていませんが、こちらに向かっていると思われます。また、松永委員と本郷委員につきましては、本日都合により欠席の連絡をいただいておりますので、申し添えます。</p> <p>それでは、開会に先立ちまして、館長の木下から御挨拶申し上げます。</p>
木下館長	<p>みなさんこんにちは。館長の木下です。猛暑、それから昨日は大雨と、天候不順の中を県外からお越しいただいている方もいらして、新幹線も止まり大変だったかと思います。お忙しいところお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。</p> <p>毎回、冒頭に申し上げているのですが、この美術館には、外部の方々に関わっていただく委員会が3つあります。この美術館協議会が、ある意味、一番由緒正しい委員会です。なぜなら博物館法に基づいているからで、「博物館は、博物館協議会を設ける」と条文にあります。これに基づいて、当館の開館とともに設けられました。皆様のお手元にもこの設置要綱が配布されているはずですが、博物館法には、こう書かれています。第二十三条「博物館の運営に関し、館長の諮問に応じるとともに、館長に対して意見を述べる機関」となっております。したがって、本日は皆様の御意見を、まずは館長の私が受け止めなければならない。そういう機関であります。それから、あと二つ委員会がございまして、開館後しばらくして、第三者評価委員会というものをつくりました。これは文字どおり「第三者による評価」のための委員会です。この委員会の主宰者は美術館ではなくて、県の文化政策課になります。つまり、所管する部署がきちんと文化施設を運営ができているかどうかを含めて、外部からチェックしていただく、そういう性格の委員会です。最後の一つは、より専門家による委員会、学芸員の研究活動を評価する委員会です。この3つの委員会で、当館の活動を、外部からチェックしていただいております。先程も日比野会長からお話がありましたが、当館の開館は1986年ですから、あと3年で40周年を迎えます。この間に美術館を取</p>

	<p>り巻く状況は大きく変わりつつあります。37年前の開館時に、根拠となった法律は博物館法でした。博物館法は基本的に社会教育法に基づいており、社会教育施設として美術館は生まれたのです。ですから、学校教育に対する社会教育という分かりやすい仕組みの中で、美術館は一般の方々を相手に教育をする施設でした。しかし、今では教育という言葉自体が少し変わり、むしろ学習、あるいは生涯学習という言葉を使うようになったと思いますし、先程加藤委員がおっしゃいましたけれども、昔の美術館は、専門家を相手にする、あるいは、専門家の作り出したものをお見せする、そういう場所であったと思います。これもすっかり変わってきているようです。また、最後に望月委員がおっしゃったとおり、観光という言葉が、非常に大きな意味を持つ言葉として、我々も直面しております。実際には、文化観光という言葉が法律に登場し、美術館はかつての社会教育施設に、もう一つ文化観光拠点という位置づけが、そのような期待が社会から求められているように思います。</p> <p>これから40周年に向けて、当館がどういう方向を目指していくか、私たちももちろん「こうあるべきだ」ということを日頃議論しておりますが、この最も重要な美術館協議会の場で、委員の皆様方から忌憚のない御意見を賜うことができれば幸いです。以上、開会のご挨拶といたします。本日はよろしく願いいたします。</p>
稲葉課長	<p>次に、美術館協議会設置要綱第三条の規定により、協議会会長及び副会長を決めさせていただきます。本日は、新たな任期となって初めての会議となりますので、会長・副会長が決まっておりません。同要綱第三条、第二項の規定により、委員の互選により定めるとなっておりますので、議事に先立ち、選出をお願いしたいと思います。御意見ございますでしょうか。</p>
望月委員	<p>私の提案にございますが、前任期でも会長を務められ、静岡県の文化状況に詳しい、二の丸美術館館長でいらっしゃる日比野委員に会長を、それから今この場にはいらっしゃいませんが、同じく副会長を務められ、静岡県の美術状況に詳しい、常葉大学教授の堀切委員に副会長をお願いしたいと思います。</p>
稲葉課長	<p>ただ今望月委員から、会長を日比野秀男委員に、副会長を堀切正人委員にという御意見がありましたが、みなさまいかがでしょうか。</p> <p>それでは会長を日比野秀男委員に、副会長を堀切正人委員をお願いしたいと思います。恐れ入りますが席の方ご移動をお願いいたします。</p> <p>ただいまから議事に移ります。これからの議事の進行は、美術館協議会設置要綱第三条第三項の規定により、会長であります、日比野会長に議長をお願いいたします。日比野会長、よろしく願いします。</p>

<p>日比野会 長</p>	<p>皆さん改めましてこんにちは。今、私に会長をとというお話がありました。前回、会長を務めさせていただきましたが、進行という大役を務めさせていただきます。ぜひ皆様の活発な御意見をよろしく申し上げます。</p> <p>それでは、お手元にあります資料を、美術館からの説明をお願いします。</p>
<p>和田副館 長</p>	<p>4月から副館長になりました、和田と申します。私からは、資料1から資料3に基づき、説明させていただきます。</p> <p>それでは、令和4年度事業実績について、資料1の1ページを御覧ください。</p> <p>1の収集について、令和4年度は購入予算がありませんでしたので、購入はなく、寄贈は3名の方から76件、令和4年度末の作品保有状況は、2,824点となっております。なお、寄贈の76点の内、昨年亡くなられた太田正樹氏からの寄贈が70点あり、平成20年度以降の総数で、106点の寄贈になります。</p> <p>次に2の保存について、年間をとおして館内外の生物環境調査を行い、作品の保全に努めました。また令和4年度の寄贈作品4点を含め、計6点の修復を行いました。</p> <p>2ページを御覧ください。3の展示についてです。令和4年度は工事休館明けで、(2)の表にありますとおり、5つの企画展を開催いたしました。1つ目の「大展示室展」は、工事後の枯らし期間を利用し、展示作品はございませんが、作品を展示するための「ハコ」である美術館の展示室について、安全かつ快適に御鑑賞いただくための様々な工夫について御覧いただきました。4つ目の「みる誕生 鴻池朋子展」では、展示室やエントランスなどの美術館内部だけでなく、美術館の裏山にも作品を展示し、美術館と自然をつなぐ新たな試みがなされました。展覧会の観覧者数は、企画展、収蔵品展及び移動美術展の目標118,000人に対し、98,861人でありました。なお、展覧会の観覧者数の内訳及び年度別の観覧者数を資料2にまとめておりますので、御確認ください。</p> <p>次に2ページ下から3ページを御覧ください。4の教育普及についてです。教育普及プログラムについては、新型コロナウイルス感染症対策を図りながら、安定したプログラムを実施いたしました。企画展ごとに館長講座を開催し、また学芸員によるフロアレクチャーも再開しました。また学校連携として、デジタルアーカイブを活用したオンライン鑑賞教育プログラムを開発しました。</p> <p>次に5の調査研究についてです。毎月1回のペースで実施する学芸課職員による研究会や、研究紀要の発行を通じ、コレクションや展覧会に関する調査研究を進めました。4ページに移りまして、博物館実習として、国内大学8名の学生を受入れました。書庫・図書室の運営として、令和4年度は、刊行図書11冊、美術雑誌220冊を購入しました。また図書ボランティア33名の協力により、図書閲覧室を175日開室しました。新たに受入れた図書につきましては、速やかに登録し、デジタルアーカイブで公開しております。</p>

次に6の広報についてです。(1)情報発信機能の強化につきましては、ホームページやSNS、マスコミへの記者提供による情報発信を、積極的に実施いたしました。また11月のロダンウィークにおいて、地域の草薙マルシェ実行委員会と協働して「丘の上のロダンマルシェ」を開催し、情報発信に努めました。(2)教育機関との連携につきましては、静岡大学の講義に講師として招へいされたり、県内4大学の学生に対し、大学事務局の協力を得て、メールでの広報を実施いたしました。5ページの中段を御覧ください。(3)アの地域との連携として、県立美術館ボランティアによる来館者サービスの実施、県立美術館友の会による活動の後援、ムセイオン静岡や草薙商店会との協働によるイベントを開催いたしました。6ページの中段になりますが、イの企業との連携について、ガストロノミーツーリズム関連の取組として、館内レストランで県産品を使用したメニューを開発しました。また(4)新たな取組として、静岡県視覚障害者情報支援センターなど、今まで交流のなかった施設との関係の開拓を行いました。

次に7の環境・施設整備についてです。令和4年度は、ロダン館1階のホール照明をLED照明に変更するなど、中期維持保全計画に基づき環境整備を行いました。また、観覧料支払のキャッシュレス化を開始いたしました。

次に8の運営についてです。(1)運営基盤の拡充について、「鞆川図と蘭亭曲水図」関連シンポジウム及び記録集の刊行において、タカシマヤ文化基金の助成金をもってし、充実を図りました。7ページを御覧ください。(2)企業との連携による運営の充実については、静岡県経営者協会の全会員に、美術館の年間スケジュールやチラシの配布を行いました。

最後に9の新型コロナウイルス感染拡大防止対策についてです。展示については、「県有施設における感染防止方針」に基づく感染防止対策を講じた上で、展覧会を開催しました。教育普及については、先に報告したとおり、感染状況を考慮し、対策を講じた上で開催いたしました。県立美術館ボランティアについては、日本博物館協会による9月の予防ガイドライン変更を受け、ギャラリートツアーグループなどを実施可能としました。

以上が令和4年度の事業実績になります。資料2につきましては、記載のとおり展覧会を開催いたしました。

続きまして、令和5年度事業計画及び実施状況です。1ページを御覧ください。

まず、収集についてです。現時点で使用可能な購入予算は100万円であり、現在購入作品の検討を行っております。

次に2の保存についてです。例年同様、館内外の生物環境調査や殺虫作業を実施し、作品の保全に適した環境を維持してまいります。

今年度最初の企画展「センス・オブ・ワンダー」展において、展覧会終了後、作品の一部に、これは草間彌生作《水上の蛍》で、壁や天井に鏡を貼り、下には水を張った空間に、無数の電球をぶら下げた作品なのですが、これの裏側にカビが発生しまし

た。非常に温湿度管理が難しいため、従来はエントランスで展示し、閉館後に扉を開放することで湿度を管理しておりましたが、今回は展示室内ということで、扉を閉め、除湿機等で管理をしておりましたが、結果としてカビが発生しました。そのため、緊急的に燻蒸処理を行いました。なお、《水上の蛍》を展示しておりました展示室の温湿度管理はしっかりできており、他の作品についても確認しましたが、問題はございませんでした。また、プロムナードの野外彫刻の保守を予定しております。

次に3の展示についてです。今年度は9月から10月、12月から2月に工事休館を予定しておりますが、表に記載のとおり4回の企画展を予定しております。また、収蔵品展については、1ページから2ページにわたる表に記載のとおり、5回の展覧会を予定しております。収蔵品展の「太田正樹コレクション展」は、令和4年度の実績の中でも説明いたしました。15年間にわたり106点の作品を寄贈いただき、昨年亡くなられた太田正樹氏の「地域の美術館を支えたい」という故人の思いを継承するために、開催いたしました。なお、すでに終了している「センス・オブ・ワンダー」展については、観覧者数見込みは7,000人でしたが、2倍以上の16,605人という多くの方にご来館いただきました。また、今年度の移動美術展は、小山町と沼津市で「旅する人生」というテーマで開催いたします。

次に4の教育普及についてです。今年度は30本のプログラムを予定しています。また企画展と関連した館長講座や、実技のワークショップを開催していきます。

次に5の調査研究についてです。学芸課研究会や研究紀要、博物館実習の受入れについては、計画通りに進めてまいります。書庫・図書室の運営につきましては、図書ボランティアの協力により、開室してまいります。

次に広報についてです。(1) 情報発信機能の強化につきましては、令和4年度と同様に、様々な広報手段を活用して、情報発信に努めてまいります。特にSNSにつきましては、展覧会開催情報やイベントなど、積極的に発信してまいります。委員の皆様におかれましても、情報の拡散に御協力いただきたいと思います。

また今年度は、館長等による記者会見方式によるマスコミへの資料提供を進めてまいります。デジタルアーカイブについても、作品・作家情報の精度向上と充実を図ってまいります。また今年度のロダンウィークは、11月1日(水)から11月5日(日)に開催いたします。(2) 教育機関との連携につきましては、引き続き県内大学との連携を進めてまいります。また県内の小・中・高校や、特別支援学校に対しても、美術館の教育普及関連の資料の提供を進めてまいります。(3) アの地域との連携につきましては、これまでの地域との連携をさらに深めるよう、努力してまいります。また、新しい取組としては、現在開催中の「糸で描く物語」展の関連イベントとして、東静岡地区で手作り市のマルシェを開催しておりますグループと協働して、美術館の敷地内でイベントを行う計画を立てております。イの企業との連携については、引き続き館内レストランにおいて、県産品を使用した企画展関連メニューの開発・提供を行ってまいります。

次に7の環境・施設整備についてです。(1) 環境整備について、中期維持保全計

	<p>画に基づき、外壁タイル修繕工事などを行います。これらにともない、9月19日から10月16日と、12月11日から2月9日は休館いたします。(2) 来館者の満足度向上の取組につきましては、憩いの場として情報コーナーを水分補給可能な場所として設置しました。</p> <p>次に8の運営についてです。(1) 運営基盤の拡充について、「天地耕作 初源への道行き」展において、芸術文化振興基金の助成金の獲得ができましたので、引き続き外部資金の獲得について検討してまいります。(2) 企業との連携による運営の充実につきましては、県経営者協会において9月に館長講演を予定しており、今後の連携についても検討しております。</p> <p>説明は以上です。よろしくお願いいたします。</p>
日比野会長	<p>ありがとうございました。それでは皆様から御意見をいただく前に、事務局の方が御出席で、座席表というものに名前と役職が書いてありますので、館長様からひととおりお顔とお名前をお願いします。</p>
木下館長	<p>館長の木下です。よろしくお願いいたします。</p>
和田副館長	<p>改めまして、副館長の和田です。</p>
稲葉課長	<p>企画総務課長の稲葉です。</p>
石上課長	<p>学芸課長の石上です。よろしくお願いいたします。</p>
三輪班長	<p>企画総務班長の三輪と申します。このたびは色々と御案内させていただきまして、御協力ありがとうございました。</p>
後藤副班長	<p>企画総務課副班長の後藤と申します。よろしくお願いいたします。</p>
新田学芸員	<p>学芸の新田と申します。よろしくお願いいたします。</p>
植松学芸員	<p>学芸員の植松と申します。よろしくお願いいたします。</p>
小松班長	<p>県庁文化政策課の文化施設班長小松と申します。よろしくお願いいたします。</p>
日比野会長	<p>ありがとうございました。前回までは副館長が全て説明するだけではなく、学芸課長と総務課長からも順次御説明いただいたように思いますが、おなじみのことかと思っておりますので、省略していただいて結構です。</p>

<p>和田副館長</p>	<p>令和4年度の実績と5年度の計画の違いを、目次を照らし合わせてみると、特段変わったことはなく、コロナの部分のみ5年度はカットされているようですが、だいたいそんなところでしょうか。</p> <p>はい。項目立てに関しましては、5カ年計画の項目に従いまして、今年度から実績と計画を立てさせていただきました。内容的には、特段例年通りの記載となっております。</p>
<p>日比野会長</p>	<p>皆様も事前に資料を郵送で受け取られたと思いますので、ある程度は見当をつけていたと思いますが、事務局側から4年度と5年度で何か変わった点があれば教えてください。昨年と同じですということであればそれはそれで良いですが、少し具合が悪くて変えた部分などがあればお願いしたいです。</p> <p>それでは気がついた範囲内で、後で色々と意見が出たところで、教えてください。</p> <p>それでは、まず最初に皆様の中から個別に聞いて、後は順次鈴木委員から順番にお聞きしますが、今のところでお聞きしたい事があれば、どうぞおっしゃってください。</p>
<p>富沢委員</p>	<p>御報告ありがとうございます。美術館での研究活動について、私は今まであまり存じ上げなかったもので、資料を拝見し、学芸課で研究会をされているというのは、大変興味深く思ったのですが、これは職員の皆さん全員参加されるようなかたちなのでしょう。終わった後で、館長と職員の質疑応答などは一対一でされるのですか。</p>
<p>木下館長</p>	<p>一対一ではなくて、学芸員全員と副館長に参加してもらっています。大体40分ぐらいの研究発表です。これに質疑応答20分が加わります。月に1回の開催ですから、学芸員は年に1回の発表となります。これは開館当初から続けてきたもので、すべての活動の基盤に研究があると考えた初代館長が強く方針を定めたのです。業務中にやるわけですが、副館長も参加し、場合によっては質問もする。これは非常にうまくいっているなと思います。多くの発表が、当館の収蔵作品あるいは寄託品を徹底的に調査し研究した成果です。情報を共有できるということが重要で、それから、それが展示につながっていきます。つまり、展覧会へとつながる。さらに、それは研究論文につながっていく。非常にうまく機能していると思います。他の美術館では持続的に学芸員の研究会を行っているとは聞いていません。</p>
<p>富沢委員</p>	<p>テーマ的には、かなり面白いテーマの発表があると感じて、館外でも関心のある人が参加できるようにしていただけると良いかと思いますが、そういうことは難しいですか。</p>
<p>木下館長</p>	<p>それはギャラリートークとして担当の学芸員が展覧会に合わせて開催しています。</p>

<p>日比野会 長 富沢委員</p>	<p>そのための基盤が研究会だと考えています。</p> <p>よろしいですか。</p> <p>はい。ありがとうございます。</p>
<p>日比野会 長</p>	<p>他には何か御意見はありますか。よろしいでしょうか。</p> <p>それでは、鈴木委員から順々にお願いします。話が前にいったり後にいったり混乱するところがあるかもしれませんが、皆さんも他の方の御意見を聞きながら、合わせて自分の御意見をお聞かせください。</p>
<p>鈴木壽美 子委員</p>	<p>では、私は9年あまり協議会の委員として、中のことを一生懸命考えてきて、色々とも考えることもあったわけですが、この1年間ちょっと離れてみましたら、すごく外から見ると美術館のことが非常に気になりまして、逆にいろいろな地方の県立美術館がどうなっているのかなと興味を持って、ついこの間も松本に行ったのですが、長野は県立美術館がありますけれども、松本は市の美術館ですね、今話題の草間彌生さんの素晴らしいたたずまいですね、全部外に出して、それを子どもたちに触って遊ばせている。常設展が草間彌生展で、そのときちょうど企画展で、アニメの方の世界の方のフィギュアだとか、私はそちらの方には行かなかったのですが、草間彌生だけを見て十分に満足して帰ってきたのですが、ものすごい人数の方が企画展の方にいらしていたんです。やっぱり今の時代だなということを改めて感じたのですが、常設そのものが現代の素晴らしい方、というのも、出身でいらっしゃるからということなんですけれど、静岡県立美術館としては、何か「これ」というものを打ち出さないといけないと。それを常設展として、そして企画展で色々なことをやっていく。やっぱり常設展が大事だということを感じたのですが、静岡は何があるかということ、やはりロダンしかないと思ったんです。世界に誇れるものはロダンしかない。このロダンをもっと上手にもっとアピールしないといけないと改めて感じました。それはやはり、外から入れることや、外に出すのは大変ですが、それこそこれからの5カ年計画の中に入れていただきたいのが、館長とも御一緒させていただいている、クレマチスのヴァンジ美術館ですね。あそこは彫刻ですけども、ロダンとはちょっと比べものにならないものですけども、関わりがある意味では、姉妹提携みたいなかたちで、県立美術館の別館として、それをもう少し有効利用して、ロダンを広げる。私は40周年記念に向けて、ロダンをもう1体購入していただきたいと。目玉はそれしかないなと思っています。そのためには内装も工夫しないといけないと思うのですが、そういう全体のことを考えておりました。特に、今までの「見るため」「見せるため」の美術館ではなく、大勢の方に、大人から子どもまでが来て、遊べる、時間を過ごせる、その楽しい美術館ということ、考えていかなければいけない。それから、レストランもちよっ</p>

	<p>とコロナでクローズしていたと思うのですが、やっぱりレストランやカフェを充実させていただきたい。それから、ロダンウィークの時にマルシェなどをしますが、それをもっと広げていただきたいと、もっとアピールしていただきたいと思います。この間、たまたま夏休みで孫が東京から、大学生ですけど、1人で来まして、うちへまっすぐ来ると思っていましたら、図書館へ行くということで、1人で新静岡から静鉄に乗ったらいいのですが、草薙で降りて、何も行き先が出てこない。それでネットで地図を見ながら来た。ずっと歩いてきたらしいんですね。県立美術館で検索すればおそらく出てきたと思うのですが、図書館だったのか、ものすごく迷ったらしいんです。でもここを歩いて楽しかった。すごい距離を歩いたけれども、プロムナードが良かったというようなことを聞きまして、そういう全く知らない人がスムーズに県立美術館まで来られるのかなというのを、おそらく新静岡ですね、バスが出ているのは。それをやっぱりもうちょっとアピールしないと、みんな迷子になるのかなと思います。県内の近くの方は分かると思いますが、アクセスの問題も考える必要があるかと。美術館自体、大分古くなっていますから、外から見たときの雰囲気をなんとか新しいものにしたい。予算のこともありますから、難しいとは思いますが、新たに今文化政策課の方で色々と考えているように、文化観光が大事になるわけで、観光施設としての美術館を、拠点とするための、東静岡のグランシップ、県立美術館、その拠点を結ぶことが大事で、その中の1つとして県立美術館が入るためには、もっともっと魅力的にならなければならないと考えております。展示のことは色々研究されて、私は今度の永青文庫との展覧会を楽しみにしているのですが、良い展示があれば、たくさんの方が見に来てくれるというふうに思います。これからまた、40周年に向けて、また5カ年計画の中で、たくさん課題があると思うのですが、色々な意見を皆様で出していきたいと思います。よろしくお願いします。</p>
<p>日比野会長</p>	<p>ありがとうございました。一問一答というのも大変なので、こちらの列が終わったところで、まとめてお返事いただくというようなことでお願いしたいと思いますが、よろしいでしょうか。</p>
<p>見城委員</p>	<p>では見城委員お願いいたします。</p> <p>私は立場的におそらく教育普及のところでの話になるかと思いますが、学校関係も、コロナのことが一段落しまして、以前のような学校教育活動ができるようになってきました。事業報告を拝見して、教育普及プログラムの方も、参加者も多く、良いなと思いました。昨年度静岡市では、美術教育の実践授業研究というかたちで、こちらのロダン館にある《カレーの市民》を対象とした、鑑賞の授業を行いました。中学生も非常に豊かな感性で能動的な鑑賞を行い、とても意義がありました。こういった地域にある素材を有効に使っての美術教育を、これからも充実させていければ良いなと思いますが、やはりキーになるのは、校長会等でお知らせいただいているということもありますが、県内中学校の美術教育の先生たち、それから小学校の先生たちに、こ</p>

<p>日比野会 長 鈴木雅道 委員</p>	<p>ういったものが教育に利用できるということをもっと周知していくことがキーとなっていると思いますので、今年でいうと、先日小笠、榛原の方で、県の教育大会、美術の大会が行われました。そういった場でのお知らせ等も、ぜひお声がけいただければ、私からも紹介します。なかなか校長会に知らせても、校長から下に降ろすということが、各校長によってアプローチが様々なので、現場の先生方から突き動かすというのが良いのかなと思いました。以上です。</p> <p>はい。ありがとうございます。次は鈴木委員お願いします。</p> <p>私は学校現場ですので、教育普及の方でお話しさせていただけたらと思います。見城委員からも話があったことは、高等学校も状況的には同じなのですが、公立私立含めて高等学校は150前後県内にありますが、美術の教員教諭が配置されている学校は、半数にも満たないという状況で、学校への美術館の活動やプログラム等の周知をしていただいても、ありがたいのですが、一方で、美術に関心のある先生が少ない学校の方が数多くあるわけで、そこにどのような広報をしていくのかが課題であると、常々私も思っていました。美術の先生方が集まる会合では、当然、私の方からも話をしていきますが、4年度の報告と5年度の計画を見させていただいて、1つ2つ鍵になるといったことと合わせて話をさせていただきませんが、まず、美術館が教育普及ということで考えると、美術館での体験というのがまず1つ既に用意をされていると。それから、美術館、あるいは美術館で働く方々が介在した体験、美術館関わった体験といった方が良いかもしれませんが、美術館というのはやはり、館に来て体験するのが1番だと思っておりますので、美術館での体験を補完するような別の体験、そのあたりの仕組みがあるといいなと思います。そういう意味では、先程お話にありましたオンラインでの鑑賞の充実、それから既に色々進めているかと思いますが、アーカイブの資料を使った何かがあるといいなと思いついて見させていただきました。基本的には、展示室にいかにか人を誘うかというところで、観光を含めた色々な政策が必要かなと思いますが、先程鈴木壽美子委員からお話があったように、収蔵品の、価値あるものが多いので、それを常設展の中で組み替えながら展覧会を行っていくか、作品の価値、文化的な歴史背景を含めて、研究の対象である事は当然ですが、全くそうではない視点で収蔵品を組替えてみるというのも、積極的にやっていただきたいなと。子どもたちが目にただけで「なんだろう」と思うような常設展のタイトルであるとか、そういったものがあると、更に私たち学校現場の者たちも、授業や生徒たちに積極的に広報しやすくなるかなと思っています。簡単ではありますが、ぜひ協力させていただきますので、よろしくをお願いします。</p>
<p>日比野会 長 石川委員</p>	<p>ありがとうございます。では石川委員お願いします。</p> <p>先程の説明を聞いて驚いたのですが、聞き間違いかもしれませんが、4年度の作品</p>

の収集が予算なしで、5年度が100万円ということにびっくりしました。5カ年計画を見ても、40周年事業として記念となる作品の収集を目指す、山水・風景画を中心として広く情報を収集すると、方針を掲げていますが、書き出すだけでは実現できないのであって、寄贈も大切だとは思いますが、それに偏りすぎてしまうと、方針にブレが生じかねないということがあると思います。そのためやはり県の支援というのが大事だだと思います。それから、先日国立科学博物館でクラウドファンディングが立ち上がりましたが、ああいったことにもチャレンジして、コレクションの新規購入というのを方針に沿ってやっていくべきで、色々な方策を探っていくことがよろしいのではないかと感じる次第です。それからもう一点、本当に深刻な問題だと思うのですが、この異常気象の中で、施設に対する被害が各地で散見されています。昨年秋の台風で、静岡市の平和資料センターが水損したと伺いますし、今年の台風でも、沼津市の歴史民俗資料館で軽微な損傷があったというふうに聞いています。文化財レスキューの事務局は県立美術館に置かれているかと思いますが、自然災害が複雑化・緊迫化する中で、こういう問題に対し、県立美術館がリーダーシップを発揮していかなければならないのではないかと、台風等の異常気象を体験するたびに感じています。私からは以上です。

日比野会
長
加藤委員

ありがとうございました。 加藤委員お願いします。

今コレクションの話があつて、予算がないというのは私が承知している限りでは、館長にコレクションに対する権限がほとんどないということが、どこの美術館についても言えると思います。方針があつて、また予算の範囲内では、館長はコレクションを選ぶことができない、これは当然のことなのですが、美術品は、オークションもあれば、その他色々な購入手段があつて、寄贈の問題もあります。様々な入手方法があるけれども、お金があれば入手できるというわけでもなく、お金がなくても入手できる方法もあるし、逆に、館長もしくは美術館の学芸員の合議でも良いのですが、最終的にはやはり館長のコレクションに対する権限、つまり、もちろん皆さんで議論された上ですが、「こういう方向で行く」という権限が、意外とどこも認められていない。形式的には認められているが、実質的には認められていない。もっと言うと、行政サイドの文化政策の総合的な推進機関が、施設の中で働く専門家に対するリスペクト、専門性に対する評価が低すぎる。うっかり美術館の館長に権限など与えたら、とんでもなく高い作品を勝手に購入してしまって困ると、そういった立場でしか考えていない。方針などでがんじがらめに縛ることはできるのが、それでもこの範囲内では決められないから、そこを専門家が決めてくれよと、その所を決められるんだという権限を。今美術館にいても、そんな権限ないんですよ、といった話で終わってしまう。とはいえ、美術館からも県に対して「我々の事をもっと信用しろ、我々は専門家なのだから。その代わり、これだけの成果を上げている。」ということをやっていたかなくてはならない。コレクションの問題で、その中では、つい最近大阪で2億

	<p>円ほどの価値のある美術品が地下の駐車場かどこかに入れられ、そのまま放置されているという話があって、それを欲しいと、きちんと保管管理した上で展示もするからというような。あれが本当にここに来たら良いかは別の話ですが、つまり、様々な美術館同士で、持っていてあまりふさわしくないなど、我が館の方針としては、もっと他にこういったものが必要なんだと、それをお互いに交換し合う、さすがに売却までいうと角が立ちますから、当面は不用品交換というか、逆に言うと、有用品の交換、どこかに持って行けばすごく生きてくるものの交換をするようなことも含めて、そういった機運を作っていないと、どれだけたってもそんなことは実現しないでしょうから、世の中で眠っているお宝を生かすために、交換を含め、公立美術館同士であればやっていけるのではないかと。そういった様々なコレクション形成のための方針作りについて、ぜひ多角的に協議していただきたいなど。2点目は、昨日私は栃木県足利市の美術館を見に行ったのですが、言って良かったのですが、美術館の中にお茶を飲める場所が欲しいなど。この暑い中で作品を見て、美術館の中を歩くだけでくたびれてしまう。お茶を飲みたい。先にお茶を飲みに行く、ということをしておいた方が安全だなと思って、足利学校という古い学校があるので、そこへ先に行って、素晴らしいお寺をまわって、その間にちょうどお茶を飲める場所があったので、お茶を飲んで、観光を十分にした上で、最後に持たせようと思って美術館に行き、展示も非常に良かったのですが、案の定カフェなどやっていなく、これだけの観光資源が周辺にあるのに、美術館側で「当館の近くには足利学校があり、お寺があり、その間にお茶を飲める場所がありますよ」ということを何一つ案内していない。これだけの素晴らしいものを持っているのに、観光に役に立てよう、それだけではなく、館の周辺にはこんなすごいものがある、ということをお互いからどんどん発信すると、美術館に来た人が他の施設に観光に行くことができ、あるいはその逆もある。たまたま図書館に行った時に、それなら美術館に行ってみようかと、この近くには美術館もあるのかと、そういったお互いの連携がなさすぎてもったいないなど。そうした相互力を生かしていくことが、有用なことなのではないかと思えます。以上です。</p>
日比野会長	<p>今、半分の方のお話が終わりましたが、ここで総務課、あるいは学芸課から、今聞きになった範囲内でコメントがありましたら、おっしゃっていただければと思いますが、いかがですか。</p> <p>やはり、全部終わってからのにしましょう。そのあたり、用意しておいていただければと思います。では、佐野様お願いします。</p>
佐野様	<p>友の会が一番多いときは、1,000人ほど会員がいました。今は360人くらいしかいません。非常に会員が少ない。一生懸命私たちも観光の企業者や商工会議所に行って、静岡や清水の経営者の皆様にPRして、「ぜひ友の会に入ってください。美術館に行ってください。」という話をして、獲得のために努力をしています。大学についても、県立大学にもお願いし、予算が無いということで少し賛助会費は減ってしまいまし</p>

たが、会員にはなってもらっています。そういうように、友の会は美術館の1つの核としてやっていきたい。

それからこの美術館の開館の時、最初に友の会を作った経緯があります。ぜひ友の会の会員になって欲しいということを皆さんにお願いしました。会員のことで一番の話題は、友の会皆さんの意見が色々ある中で、企画展を中心に美術館を見ているようです。静岡市美術館は、非常に分かり易くとっつきやすい題名の企画展を行っています。例えばモネの「モネ展」です。そういった展覧会には沢山の人が来館する。東京でもやはり名前の知れ渡っている作品の企画展に人が集まるようです。

私自身、かつて県庁の文化事業課長をしていた時に、1つの企画展に10万人の来館者目標を設定しました。先程観光の話が出ましたが、丁度ロダン展の時、6,000万円の広報費を観光課に予算を再配当したら、20万人から30万人の人が美術館に入った。当時知事から「佐野さん、ロダン展に予算6,000万円付けたけど、結果はどうでしたか」と言われましたが、「こういうわけで、この位の人が入ったから、大体ペイできたと思います」と答えました。儲かるという話ではなくて、目標を超えることができたかどうかです。

その時の広報は、新幹線のこだまの各車両左側の所に、静岡県のロダンの広告を出しました。大阪から東京へ行くときに必ず見られるようにしました。これをやったら非常に効果があり、県外からの人も、美術館に来ました。来館者の20パーセント位が県外からのお客様だったようでした。

企画展を開催しているときに、こういったPRをぜひ行っていただきたい。ということは、美術館だと直接に予算をとることができないので、県の文化政策課で予算を取ってほしい。当時、私自身、非常に苦勞し、財政課に色々お願いし、予算をとりました。美術館で良い企画展を開催して、それにはやはりお金をかけてほしい。そのお金は県民のものでありますから、是非県の方で予算をつけられるよう努力をしていただきたい。

では富沢委員お願いします。

日比野会
長

富沢委員

本日冒頭で、館長さんが、これまでどおりの美術館というのは専門家が作ったものを見る人たちに提示するというものであったが、今の美術館はそういったものではなくなりつつあるということをおっしゃったと思いますが、私は国立民族学博物館の運営に関わっていて、共通して感じることは、博物館も美術館も対話型のものに確実に向かっているということです。民族学博物館の場合には「フォーラム型情報ミュージアム」をキーワードとして、見る側や資料提供者、展示を行う博物館側の交流やグローバルに開かれた情報共有を進めていくといった対話型のものが実施されていて、館長さんのお考えにも、大変同調できる所です。それをどういう風にも実施していくかというところで、今回美術館のホームページなどを拝見したのですが、例えば、中村宏

さんや森村泰昌さんの動画をすごく面白く拝見して、あれを通じて、作品の鑑賞の仕方も変わってくるかなというような印象がありました。こういったことをもっと増やしていけると良いかなと思います。それから、職員の方が、研究を進めると同時に展示物について説明するという「ストーリーズ」展等の最近の企画も大変興味深いと思います。「エジプト展」等の大きな企画で客を呼ぶのも良いですが、収蔵品は、まさに静岡がらみの作品とか、風景とか、いくつか特色的なものがあるかと思うのですが、それを職員の方が、外部に対し分かりやすく「私はこういうふうに見ています」というようなかたちで提示するのは、大変面白いと思うので、既存の収蔵物をいかに生かしながら対話型の美術館を展開していけるかというところが、非常に期待したいところです。もちろん、それ以外の特別な企画展というのも、それはそれで良いかと思いますが、常設展をいかにうまく生かしていくか、そうでないもったいないかなという感じがしています。対話型という点で言うと、万人に開かれた対話型ということになると、美術品はどうしても見るのが中心になるかと思いますが、最近触るや聞くといった方法も試みられているかと思いますが、まさに五感をいかに駆使しながら鑑賞するかということ、例えば視覚障害者の人が鑑賞できるものとして、ロダンの彫刻なども試みられているかと思いますが、そういうところについて、更に可能性を探究されていくとよいのではないかと思います。国立民族学博物館の場合、視覚障害者の方が研究者としていらして、触って楽しむ展示物というコーナーも設けられているので、一つ、ヒントになるかなと思います。それからもう一点は、美術館として外部といかに交流しながらできるかという点については、ムセイオンの方にかかっているので、私からのお願いということもあるのですが、例えば、静岡市の方の文化振興財団とかが中心で、音楽と美術を融合したような企画、昨年ですと静岡市美術館の「ボタニカルアート」展みたいなことが結構色々とやられていると思うのですが、県レベルですと、まだそこが十分展開できていない感じがしているので、まさにムセイオンの枠組みを使いながら、更にそのあたりを広げられていったら良いのではないかと期待しています。以前に、仮面を美術作品であると同時に生活用具ということで、学術と美術が一体化したようなかたちで、国立新美術館と国立民族学博物館との合同の展示をやったりしておりましたが、そういうような試みが可能性として考えられないかなと。例えば大学と美術館との合同で、薬用植物とそれをアートにしたものと、共通の展示みたいなものができたら、面白いのではないかと。そういったことで、美術館と美術館以外の大学や博物館、場合によってはSPACなどの演劇をやる人たちと、何か協働の企画のようなものができれば楽しいのではないかと思います。そういったことも今後一緒に考えさせていただければと思います。

では富澤委員お願いします。

日比野会
長
富澤委員

はい。私は感想のようなものばかりになるのですが、まず数字を見せていただいたときに驚いたのが、「大展示室展」について、昨年「こんなに面白いのに人が来ない

のだな」といったことを書いたと思うのですが、そんなことはなくて、たくさんの方が来ている。また、「みる誕生 鴻池朋子展」が、見込み数より大きく、更に今年に入って「センス・オブ・ワンダー」展が大きい。県美のいくつかの柱の中で、現代美術も大きな柱と思うのですが、今まではそこまで人が来るわけではなくて、好きな人は好き、といったものなのかと思っていたのですが、そうではなくなってきたのだと、これが見たくて、「県美でこういうことをやるならまた行こう」という人が増えたのだなということが、大きな感想としてありました。実際私自身、他のものも良かったのですが、この3つはすごく印象が強かったものでした。「みる誕生」は美術館から出て行けるということが今までなかったことで、その日はたまたま雨上がり夕方に近い時間で、独特な光の具合ですごくきれいだったんです。ただし足下が悪くて少々怖くて、そのドキドキも含めて、今までにない体験でした。他館でも開催されましたが、この場所に特化してアレンジされて全部できあがっているということが分かるものでしたので、とても面白かったです。それで、どんな人が来ているんだろうということ、資料2を拝見したときに、招待・減免枠がかなり多いのだということが分かったのですが、これは自主企画の場合は大学生が多いのでしょうか。どういうタイプの人が来ているのだろうかということが気になりました。今までは70歳以上が強かった部分が、誰が増えて、どの辺の層で変動が起きているのかということが気になりました。それをうまく掘り起こすことができれば、さらに集客につなげていけるのではないかと思います。それから、人を集めるという点では、カフェをなんとか閉館まで営業してもらえないかなとよく思います。15時以降はお茶だけでも良いので、お菓子くらいはあっても良いですが、カフェは営業してほしいというのが1つです。それから、「絶景を描く」展も面白かった割には人が来なかったことが残念で、大事な柱の1つである風景画で、来れば面白かったのに、という気持ちがありました。うまくいくのかは分かりませんが、観光拠点との連携という意味で、みほしるべや富士宮の富士山世界遺産センターの資産とすごく絡む内容だったので、今回1回きりのパターンのものではないかと思しますので、何か連携する方法もあるのではと思いました。また、移動美術展は、来る人が少なかったのではなく、見込みが大きすぎたのではないかと数字に関しては思います。それから、先程もあつたとおり、館蔵品取得の予算が県から引っ張れないというのがつらいなと伺っていても思ったのですが、一方で、太田正樹さんという方の御寄贈の力というのを、アマリリスにも書かれていて、実際に展示の中でも感じる折が多いので、それはすごいことだなと思います。それは、アマリリスを読むとか、たまたまこのコレクションをテーマにした収蔵品常設展を見たとかした人に限られているかもしれませんが、ある程度、私のような者にも伝わってきているということがまたすごいことだと思います。あとは、デジタルアーカイブが整って何よりなのですが、実際どれほど見られているのかと疑問もあります。それは昨年、昨年、私は病欠しまして、それで紙での御報告で書いたことですが、何らかの作品データに行き着いても、JPEG等でダウンロードすることができないというのは痛いかなと思います。小さい画像を眺めて、ふーんと思って、それで終わってしまう

のは残念です。私たち一般人は、とりあえず画像をダウンロードして、例えば年賀状に使ってみたい、とにかく手元に残しておきたい、といった思いがありますので、もう少し、1-2メガ程度の画像で良いですし、もし（著作権が切れているものについてもなお）権利の問題がいろいろあるならば、ウォーターマークはやや無粋なので、昔ブリティッシュライブラリーがやっていたように、隅にかっこよく館のロゴを入れてしまうねおしても良いと思いますので、もう少し画像を使えるようにしていただけたらうれしいかなと思います。今の話は一般人向けですが、それとは別に、研究利用等を考えますと、色々なウェブサイトからアグリゲートして相互運用してもらえるようなかたちが望ましいとも思います。IIIF（トリプルアイエフ）など色々検討できるやり方があるかと思えます。また、そこに出したからといってどれほどの効果があるかという点と難しいですが、ジャパンサーチや文化遺産オンラインについて、現在は池大雅の屏風絵くらいしか出ていないのではないかと思うのですが、ああいったところに引っ張られると、研究利用はしやすくなります。せっかくのデジタルアーカイブが少しでも活用できればと思います。最後に、富沢先生からもお話があった学芸員の方々の研究会について、もちろんそのままオープンにできないものと存じますが、例えばムセイオン関係の大学や県内4大学の教員には、限定的にでもオープンしていただけると、私も来たいと思うこともありますので、そういったことも考えていただけたらありがたいと思います。私からは以上です。

望月委員をお願いします。

日比野会
長
望月委員

私は自分の立場でお話したいと思います。観光の誘客について、従来は観光客の交流客数で勝負しているところがありまして、「これだけ人が来た」という観点で予算を取るようになっていたのですが、観光地もそうですが、現在はSDGs系の「持続可能な観光」であるとか、オーバーツーリズムのこともあり、ただ人がたくさん来れば良いという観光から、その地域にどの程度お金を落としてくれたかという観光が、それが事業者にとっても持続可能な観光をやっていくためにも、最低限の収入を得なければいけないというところがあり、消費額を評価しているのが現実です。そういった観点で美術館の運営と計画を見させていただくと、教員のために減免した事で集まっている人数と、一般の方々の区別をしながら、その方々が見に来る目的というものを、行動に移すきっかけは多様化していますので、何が当たって人はそこにお金を払って来るのか、ということも、もう少し分析する必要があると思います。それが結果として企画展になったとき、料金体系については分かりませんが、2,000円出してでも来たいと思うのか、1,500円でないと来ないのか、その単価がどういう風に決まっているのかは分かりませんが、美術館に足を運んで現地に行きたいというまでのところに、先程鈴木委員がおっしゃったように、もちろん情報を流したりアクセスについても大切だと思いますが、そもそも「どうしても来たい」と思わせるようなものをどう作っていくのか。そのところに料金でペイできれば良いのですが、ペイできないの

	<p>であれば、クラウドファンディング等使えるものを使ってやるということなのですが、正直私は国立科学博物館のクラウドファンディングを見たときに、すぐにお金が集まるのに、どうして国立なのに予算をつけないのだろう、クラウドファンディングに頼って財源を集めるのは違うのではないかと思う部分も多少あります。全国の館がクラウドファンディングを始めたとき、どうなってしまうのだろうと思うところもあります。いずれにしろ、来館者数のみではなく、来館の目的も分析しながら、そこにお金を払ってくれるか、何にならお金を払って、それはどういった単価が適当なのか分析する必要があります。佐野さんがおっしゃったとおり、過去、目立った時には何十万人も来館者があり、今はずっと10万人を切っていますが、復活させるということが目的なのか、運営に関してより良いものをとという観点でやっていくのか、正直見えておらず、方針を伺いたいです。以上です。</p>
<p>日比野会長</p>	<p>ありがとうございます。では、事務局側から今までの御意見を聞いた中で、お話しいただければと思います。</p>
<p>和田副館長</p>	<p>私からは、購入予算の話がはじめに出たと思いますが、昨年度は0ということで、これは、今年度につきましては、実は予算上では300万円ついているのですが、そのうち200万が企業向けのふるさと納税ということで、納税があった場合には使うことができます。残念ながら今現在は応募がないため、実質的に残り100万円というかたちになっています。外部からのお金ということで、ふるさと納税は個人向けも企業向けもありますが、応募がないと。ではこれ以外に購入資金がないかという、実は基金があり、静岡県立美術博物館建設基金というものがあります。これは37年前の美術館創設時に設立された基金なのですが、そこには15億という資金がありまして、今現在、残り4億ちょっとあるのですが、これにつきましては、例えば40周年であるとか、記念の時に高額なものを、そういった時に1億5,000万円以上の美術品を購入するために使用可能な基金がありますので、毎年度作品を購入する予算は非常に厳しいですが、40周年に向けてなどの場合には、こういった基金を使うことができます。</p>
<p>石上課長</p>	<p>教育普及について、御意見頂戴しありがとうございます。私どもも現場の先生方とつながっていききたいとは思っておりますが、そもそもどういった仕切りで小中高勉強不足などがありますので、ぜひ教えていただきたいです。作品のレプリカもありますし、学芸員という専門の人材がおりますので、ぜひ現場で使っていただきたいと思っておりますので、勉強させていただきたいと思っております。先程鈴木壽美子先生からありました、子どもたちの鑑賞を広げようということについて、私もずっとやりたいと思っているのですが、普段は美術史の文脈に則った展覧会が多く、その幅を広げていくということがあまりできていなかったかなと思っておりますので、そのあたり 予算のことについては聞いた話になるのですが、予算をつけてもらうために美術館だけで「お金がいるんだ」と言っても仕方のない話ですので、県庁の方に、美術館</p>

木下館長	<p>の専門性や方向性についての理解をしてもらうための努力をしなければいけないなという事は感じています。それがあって予算をつけていただいたり、権限というお話もありましたが、任せてもらえる部分も増えるのかなと思います。この点は私が見るところ、あまり進歩していない部分かと思っておりますので、本日は文化政策課から小松班長に来ていただいておりますけれど、県庁と美術館の連携が本当に大事だと改めて思いました。</p> <p>皆様からの御意見を伺い、大きく3つの問題点に分けてお話ししたいと思います。1つはコレクションについてです。購入予算がないことは言うまでもなく、館長にそれを増やす権限はありません。むしろ県の文化政策審議会で発言すべき内容かと思っております。しかし、そこに出席しますと、多様な文化共生を求めた文化行政を展開する中で、どの機関もお金がないという現実がある。すると、美術館にとって収集活動がいかに重要なことかを、どのように説得するかが求められるのだらうと思っております。実はそのために、当館の5カ年計画の冒頭に「収集」を置いたのです。従来、冒頭は「展示」でした。5カ年計画自体を作成したのは近年のことですが、美術館が第三者評価委員会の評価を受けるときの第1項目が「展示」だったのです。これは、美術館という場所が、展覧会を見に行くための場所、そう受け止められてきたことの証です。しかし、その基盤にはコレクションが存在しているということで、この順位を逆転させました。これまでの37年間に蓄積したものがああります。そうすると、いかにコレクションを増やすかだけでなく、いかに活用するか、いかに再評価するかも同じぐらい大切です。それらは、これまでに当館に携わってきた学芸員たちが選んで収集してきたものです。時代とともにその評価は変わるだろうし、かつてとは違う見せ方もありうる。コレクションを増やせないという現実がある一方で、すでに手に入れたものをどう見せるかが問われていると感じます。市場価格に換算すると、とんでもなく高額になっている作品があります。先日の展覧会には草間彌生の絵が出ていましたが、25年ほど前に、草間がデビューしたころの作品を2,000万円くらいで買いました。それが今では100倍ぐらいになっています。先に示しました美術館の基金とは、かなりの部分が作品の購入価格を合算しただけなのです。美術館のコレクションというものは、実は膨らんで大きくなっているともいえるのです。今後、コレクションをどう生かしていくかは、我々に課せられた大変重要な課題です。そのためにも、先に話題になった学芸員の研究会が重要になると思っています。そこに私も参加しながら、本当に有意義な場だと思っています。</p> <p>第2に教育の問題も、冒頭でお話ししましたように、社会教育施設として制度設計されたことの問題も、社会教育の意味が変わってきていることを考慮しなければなりません。学校教育と社会教育だけが合った時代と異なり、教育基本法の中に生涯学習が盛り込まれ、人は死ぬまで学び続けることが求められているわけです。そこに、美術館がどのような機会を提供できるかが問われていると思っております。具体的には、教育普及活動として活動を展開しています。現場の先生とどうつながるかなどの重要な課題</p>
------	---

がたくさんあるかと思いますが、そもそもこの美術館の中にある実技室の位置づけをもっと変えていけないかだと思います。物理的に実技室は建物の真ん中に位置しています。つまり昔の発想だと、展示室が階上にあり、展示室を目指してみんなが来ると。そういうふうに設計されているわけですが、一方で1階の中心に実技室があることの意味を考え直してみたい。実技室はこれまでも精力的に活動を展開してきました。年報を見ていただければ分かります、大変な数の活動をしています。鈴木委員がかつて当館に勤務していらっかったことは存じ上げなかったのですが、学校の先生に3～5年来ていただいて活動をするという、それはある時代の制度設計によるものですね。そうすると、美術館の収集展示活動の方針と実技室が同じ方向を向いているか、しっかりと連携が取れているか、そのあたりの検証が必要だと思います。着任する先生にとっては突然の異動になりますので、心の準備なく新年度が始まり、数年は勤めなければならないという状況の中で、実技室とはいったい何だろう、そもそもこの名前が良いのか、といったことも考えなければならないと思います。

それから、対話型という点も、非常に考えさせられる問題だと思います。昨年の「みる誕生」展については、目の見えない方と一緒に展覧会を見る機会をつくりました。以前であれば、視覚障害者の方は見ることができないので触っていただく、そういった発想で、触る彫刻展や触る絵画展など、触って鑑賞する機会を提供してきました。これは欧米の美術館が先導しました。最近は文字通り対話型の、目の見えない人と健常者が絵の前に立って話をし、楽しむ。そこでは絵に触ってはいない。そこに絵というものがあるという前提で、人間が言葉を交わすという新しい体験が求められています。視覚障害者の方も、その場で絵を巡って話をすることの喜びなど、求める体験が変わっていくのだらうと思います。

3つ目の問題として、広報があります。広報というのは発信です。かつては広報を宣伝と見なしていた時代もありました。コロナ禍により、オンラインという従来あまり考えていなかった形式が現実化し、それに応じてそれなりのコンテンツを制作し、発信しました。オンラインミュージアムが推奨された一方で、リアルに美術館に足を運んでもらうことの重要性が問われました。ヴァーチャルとリアルをどうつなげていくのかというとても重要な課題が生まれました。また、望月委員がおっしゃったマーケティングについては、社会が何を求めているのか、的確なマーケティングを行わない限り、分かりません。それにはそれだけの人力、人材が必要です。広報専門のスタッフを1人つけて欲しいとずっと要求しております。ここが非常に重要なところ。どう充実させていくか、実際にはどういったニーズがあって、美術館に何を期待されているのか。昨年の「大展示室展」には、これほどまでの観覧者数は期待していませんでした。おもしろいことに「絶景を描く」展も「近代の誘惑」展も、当館自慢のコレクションを並べているのです。それらよりも、作品が何ひとつ並んでいない「大展示室展」に来てくれた人の方が多い。これはどういうことか。これは分析対象にすべきですね。先程富澤委員がおっしゃったように、現代美術への期待が高まっている。「現代美術」という言葉は慎重に使わなければいけませんが、草間彌生も大変な人気

	<p>ですし、それから太田正樹さんという篤志家から100点を超える作品を20年以上かけて御寄贈いただいた。これは最初の収集の方につながる話ですが、予算をつけるといっているだけではだめです。予算をよこせというのはある意味昔の発想で、県は公金を使って県民のために価値あるものを手に入れてみせる、そういう発想が必要だと思います。太田正樹さんの場合は、自分で形成したコレクションを寄贈するのとは少し違っていました。美術館にとって必用なものを学芸員とともに探す。当館にはこれが欠けているからこれを足しましょうと、自分のポケットマネーを使って買ってください。美術館への大きな期待がある。それを受け止めながら、これからの活動をどう展開していくかが大切ですね。</p> <p>最初に、去年と今年で何が違うのかというお尋ねがありました。令和4年度と5年度で1つ確実に違うのは、企業に対してアピールしていこうという姿勢です。昨年9月に静岡県経営者協会で、「美術館とは何か」を3回にわたってお話する機会を作ったのですが、コロナで中止になりました。今年の9月によりやく実現します。この経営者協会だけではなく、美術館を取り巻く様々な人たちに向かって、美術館が人間社会にとってどのようなものかをご理解いただく。そしてその先に、40周年に向けて御協力していただくような機会を作っていきたいと考えております。来年のこの協議会では、もう少し先に進んだ報告ができるように努力したいと思います。以上です。</p> <p>ありがとうございます。</p> <p>時間も過ぎてほとんど終了の予定ですが、議題の中で、その他5カ年計画というものもありますが、説明がありますか。</p> <p>ありません。</p> <p>皆様から御意見を頂戴しましたが、最後にどうしてもこれをお伝えしたい、お聞きしたいということがあればお願いします。</p> <p>美術館の広報の件で、ボランティアの方が100人を超えていてすごく心強いと思います。制度的な広報担当の方を置くというのはひとつの方法ですが、例えばボランティアの方々を通じSNSでの広報等を行うことは、可能性が大きいのではないかと思います。実際どのくらい動いているのでしょうか。</p> <p>ボランティア制度を活用したSNSでの広報ですが、以前ボランティアさんに、SNSに投稿するための記事を書いていただくという試みをしたことがあります。書いてくださった方は、収蔵作品について詳しく調べて記事を作成してくださり、そちらをSNSで公表いたしました。ただ希望者は多くなく、3件程度はアップしました。またボランティアとは違いますが、広報サポーターという制度がありまして、サポーターさんに身近な所に広報していただくという事は実施しております。</p>
日比野会長	
和田副館長 日比野会長	
富沢委員	
植松学芸員	

鈴木壽美子委員	<p>以前美術館のこれからの在り方といいますか、そういったこれまでやってきたことではなく、有効活用する貸出といったかたちも考えても良いと思います。例えば以前はコンサートをやっていましたが、今はやっていないのでしょうか。静岡新聞社がやっていたと思うのですが。コロナもありましたが、会場でできますし、企業で記念式典やパーティーをそういった所で開催し、ロダンを見せながらそういう集まりをします。来年のパリのオリンピックでは世界遺産をほとんど利用しますし、イギリスでもテート・ギャラリーでは展示室の中で食事会を開催したことがあります。絵が全部掛かっている展示室内で飲食ができるのです。毎年美術館の中で食事会をすることが恒例になっている企業が世界中にあります。今年はパリのコンシェルジュリーでパーティーが開かれますが、に行つて、刑務所があった場所ですが、昔の宮殿です。それからオリンピックではベルサイユ宮殿も使います。このように、色々な意味で絵だけにとらわれず、これを見てください、これを使ってくださいと、オープンにしていけたら良いのではないかと思います。</p>
日比野会長	<p>ありがとうございました。それでは大分時間も過ぎましたので、この辺でよろしいでしょうか。</p> <p>美術館も色々大変とは思いますが、隣の図書館が東静岡に移転すると、また大きな動きが出てくるでしょうし、色々な力を使い、美術館の活性化につなげていただければと思います。私からは以上ですので、後は事務局の方からお願いします。</p>
稲葉課長	<p>委員の皆様におかれましては、長時間にわたり御審議いただきまして、ありがとうございました。最後に木下館長から一言お願いします。</p>
木下館長	<p>ありがとうございました。予定の時間は過ぎてしまいましたが、もっともっとお話を聞きたいと思いながら聞いておりました。最後の鈴木壽美子委員のお話は、本当にそのとおりでと思ひまして、これから美術館がどういう期待に応えていくのかというためには、間違いなく必要なことだと思います。他方で、そのための内部の組織も、それに応じるようなかたちにしなければならないということになりますので、マーケティングや広報も必要で、外とつながる窓口をきちんと据えること。現状は個別に対応して、その場その場でやっているという感じなので、そのあたりをこれから設置していきたいと思ひます。本日は本当に貴重な御意見を承りました。ありがとうございました。</p>
稲葉課長	<p>皆様からいただきました御意見を、今後の美術館運営に生かしていきたいと思ひます。本日は誠にありがとうございました。</p>